

角川選書

釋 迢 空

山本健吉



—59—

山本 健吉

明治四〇年、長崎市に生まれる。昭和六年、應慶義塾大学国文科卒業。故折口信夫博士の直系の弟子である。のち吉田健一、中村光夫等とともに雑誌「批評」を創刊し、「私小説作家論」を連載。昭和二四年「踏魂歌」によって戸川秋骨賞を受く。また昭和三一年『古典と現代文学』昭和三八年『柿本人麻呂』で、それぞれ読売文学賞を受く。他に『現代俳句』『芭蕉』『小説の再発見』等がある。文芸家協会理事。ペンクラブ理事。俳文学会々員。芸術院会員。

角川選書 59

釋 迢 空

昭和47年7月10日 初版発行



著者 山本健吉

発行者 角川源義

印刷者 中内あき子

発行所

株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見2-13 〇195203
TFL 東京(265)7111〈大代表〉〇102

Printed in Japan

中光印刷・宮田製本

0395-703059-0946(0)

角川選書

釋 迢 空

山本 健吉



59

角川書店

目次

一 釋迢空歌抄

釋迢空歌抄

七

二 釋迢空、人と業績

折口信夫——学問と思想

二〇五

孤独者の歌の近代——人と作品

三九

恐怖と憧憬と——作品解説

三六

鎮魂歌——『死者の書』を讀みて——

二四〇

三 釋迢空随想

釋迢空追悼

二六五

二つの歎び

二六六

『口訳萬葉集』に記された評語

二六九

「人はいさ」の解釈

二九三

釋迢空と明日香

二九六

『わが師 折口信夫』

三〇三

四 迢空幻想

迢空幻想

三〇九

あとがき

三四四

解説

上田三四二

三三八

発表年誌一覧

三四五

一

釋迢空歌抄

- 一 たびごゝろもろくなり来ぬ。志摩のはて 安乗の崎に、燈の明りみゆ 七
 二 誰一人 客はわらはぬはなしかの工 さびしさ。われも笑はず 七
 三 牕の外は 師走八日の朝の霜。この夜のねぶり 難かりしかも 元
 四 遠き代の安倍の童子のふるごとを 猿はをどれり。年のはじめに 元
 五 水底に、うつそみの面わ 沈透き見ゆ。来む世も、我の 寂しくあらむ 咒
 六 をとめ居て、ことはあらそふ声すなり。穴井の底の くらき水影 咒
 七 人も 馬も 道ゆきつかれ死にけり。旅寝かさなるほどの かそけさ 充
 八 葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり 充
 九 はしために、昼はあづくる。くりやべに、鍋ことめける この夜ふけかも 九
 一〇 風ふけば、みぎはにうごく 花の色の くれなゐともし。ゆふべいたりて 一〇
 一一 年たけて、歌のこゝろの ほそりゆく身を 思ひけむ。ひとりある時は 一一
 一二 喰ふそばの 腹にたらふが、あぢきなし。遠遣る心さだまる如し 一二
 一三 気多の村 若葉くろずむ時に来て、遠海原の 音を聴きをり 一三
 一四 雹ふりて 秋 たのみなし。村のうちに、旅をどり子も 入れじ といふなり 一四
 一五 はい駕籠を待ちこぞり居る 人なかに、おのづからわれも 待ちごゝろなる 一五
 一六 山峽の残雪の道を 踏み来つる あゆみ久しと 思ふ しづけさ 一六
 一七 軒竝みに、今日も 声せぬ朝姿し。漱ひの音も、憚りて吐く 一七

たびごとくもろくなり来ぬ。志摩のはて 安乗の崎に、燈の明りみゆ

釋逍空の自撰年譜には、大正元年（二十六歳）の項に、次のように書いてある。「八月、志摩・伊勢・紀伊に涉つて、熊野廻りをする。同行、生徒伊勢清志・上道清一の二人。此時、教育の意義を痛感する。『海やまのあひだ』第一稿は、此間に出来る。」

この前年十月から、逍空は大阪の今宮中学校の嘱託教員となり、三年の生徒を受持ったが、同行の二人はこのときの生徒である。「心の美しい生徒を二人連れて出た。心の底には、極度に敬虔な、教育者としての反省を持ちつづけてゐた」（自歌自註）と逍空は書いている。

海と山の島国 十三日から二十五日まで、宇治山田・鳥羽・安乗・田曾・引本を経て船津に出る途中、山中で道に迷い、二日間絶食して彷徨したという。それから尾鷲・瀬八丁・新宮・田辺を通つて、御坊の友人（田端憲之助）を訪い、大阪に帰った。大事な生徒をあずかりながら、絶食して彷徨するといふ目に遭わせてしまったのだから、これは逍空としても異常な経験であつたはずである。

この旅行は、逍空の歌にとつては、画期的な意味を持った。この間に百七十余首の短歌の収穫があり、逍空はそれをまとめて『安乗帖』と題する稿本歌集を編んだ。そしてこの旅中の歌によって、これまで記紀歌謡・萬葉・古今・新古今・玉葉・風雅から、近代の新詩社流・アララギ流・躬治流・空穂流・啄

木流・白秋流に至るまで、広く撰取しながら揺れ動いていた逕空の歌風が、どうやら独自の歌境をさぐり当てるに至ったと思われるのである。『海やまのあひだ』の第一稿がこのときに出来たというのは、結局習作時代が終って、本格的な詩作の第一歩をこのとき踏み出したという自覚が吐かせた言葉である。ついでに言えば、『海やまのあひだ』という歌集名も、このときの経験に胚胎はいたいしていると思う。このときの行は、山中の徒歩旅行と、渡船の便の利用とが主であるが、海に浮き山にさまよった十三日間の行程のあいだに、己れの「たゆたふ命」をしみじみと嚙かみしめることがあったのであろう。

『安乗帖』の短歌は、その後削除・改訂・増補を加えながら、翌年編纂された稿本歌集『ひとりして』の第四部「うみやまのあひだ」をなしている。総歌数九十九首である。さらにそれは、大正十四年五月に刊行された処女歌集『海やまのあひだ』に、「奥熊野」と題して二十三首が採録されている。逕空にとって想い出の深い詠草であったことが知れるが、それよりも終始この旅中の歌を「海やまのあひだ」と題し、ついには処女歌集の名にまでふくらましてしまったことが、注目すべきだろう。海と山との接する狭い島国とは、この日本のことであり、その考えは柳田国男翁の『山島民譚集』（大正三年）という初期の書物にも現れている。「海やまのあひだ」とは、結局彼の羈旅きりょの歌に名づけられた名なのであった。そして彼は、羈旅の歌の精髓を万葉の人麻呂ひとまろ・黑人くろひよ以下の羈旅歌によって学んだのである。

ここに挙げた一首は、以上挙げた三つの自撰歌集のどれにおいても、冒頭に置かれている。最初は結局「赤き燈の見ゆ」となっており、『ひとりして』の異本（逕空は大正二年に、架蔵清書本の外に、筆写本を武田祐吉・吉村洪一・田端憲之助の三氏に贈っている。なお大正四年に安藤英方氏に贈られた一本があって、先年筆蹟のまま印行された。『うみやまのあひだ』と題し、第四部に当る部分を冒頭に置いている）に始めて、「燈の明り見ゆ」と推敲すいこうされている。作者の自註に言う。

「磯部からの矢へ乗り出すと同時に、私の心は、初めてと言つてよい程、動揺を感じた。併しそれは極めて静かなもので、ちやうど遙かな入り江の涯に見える、燈台の灯りのやうに、深い期待を持たせた。それを私は、『もろくなりきぬ』と簡単に言つてしまつてゐる。これでは、立ち入つてみない他人の心で、感じた感じを取り出した私のことばではない。併し感傷に幾分、中世的な優美を持たせて、これによいと思つてゐた。勿論『燈のあかり見ゆ』も、ほんたうには言つてゐない。もとは『明き燈の見ゆ』ですましてゐたが、これは明きがいつまで経つても拘泥になつた。』

羈旅の感傷 安乗の崎は志摩半島の中ほど、北の菅崎とともに深くの矢湾をかかえこんだ岬で、東北に向つて細長く四十町ばかり突出している。的矢湾の奥深く磯部の里がある。迢空等は旅の第一日を宇治山田から鳥羽を経て、磯部の上の郷に伊雜宮いざらのみやを訪れ、下の郷から船で安乗へ渡っている。その船の上から、岬の灯台を望んだのがこの歌である。その夜は海人部落、安乗に一泊している。

「たびごゝろもろくなり来ぬ」とは、若い迢空の感傷である。だがこの感傷は、純化されながらも終生失われていない。その感傷に実質を与える深い旅情が、この歌にはただよっている。感傷に幾分、中世的な優美を持たせたとは、「もろくなり行く」の作例が、新古今・玉葉などに散見することから来ている。おおかたは涙に言い、それも木の葉や花や露などの落つるさまを比喩として持つて来ている。

嵐吹く 峰の紅葉の日に添へて、もろくなり行くわが涙かな 俊成（新古今）

木枯に 木の葉の落つる山里は、涙さへこそもろくなりけれ 西行（玉葉）

萬葉には「もろき命」と詠んでいるが、これら中世短歌の作例は、崩おれやすい心、すぐ涙をこぼしがちな感傷に言っている。そういう作例を踏まえて、ここでは旅情が深く心を揺るがし始めたことに使っている。だが、この歌そのものが、中世的なのではない。むしろこれは、非常に黒人の羈旅歌の境地

に近い。それは第三句以下の叙景が、感傷を具象化しているからである。そしてこの感傷と叙景との息づかいは、黒人のものなのである。

何処にか船泊すらむ。安礼の崎 撈ぎ回み行きし 棚無小舟
(卷一・五八)

旅にして物恋しきに、やましたの 朱のそほ船 沖に撈ぐ見ゆ
(卷三・二七〇)

我が船は 比良の湊に撈ぎ泊てむ。沖へな放り。さ夜ふけにけり
(卷三・二七四)

黒人の歌を、その意識的作歌態度とこまやかな観照力とのゆえに、ややともすれば人麻呂以上に高く買う気持は、終生変らなかつた。黒人の歌を高く買ったのは、逈空が最初と言つてもよいが、それは言わば自分自身の作歌態度の確立と深く係り合つていたわけで、その証明を、私はこの『安乗帖』の一連の作品、殊にこの歌等に見るのである。これは彼が、人麻呂においても躰旅歌を高く買い、また赤人や古歌集や旅人の儼従たちや天平八年の遣新羅使人たちの躰旅歌の価値を賞揚したことも同じ意味合いを持つ。たとえば、

あらたへの 葛江の浦に 鱸釣る 海人とか見らむ。旅ゆく我を
(卷三・二五二)

柿本人麻呂

印南備野も行き過ぎかてに 思へれば、心恋しき加古の島 見ゆ
(卷三・二五三)

柿本人麻呂

さ夜ふけて 夜中の潟におほほしく 呼びし舟人、泊てにけむかも
(卷七・一二二五)

古歌集

武庫の浦を撈ぎ回む小舟。粟島を背向に見つ つともしき小舟
(卷三・三五八)

山部赤人

巖いそごとに 海人の釣船 泊てにけり。我が船泊てむ 巖の知らなく

大伴旅人倭從（卷十七・三八九二）

我のみや 夜船は傍ぐと思へれば、澳おきへ辺の方に、艦とらの音すなり

遣新羅使人（卷十五・三六二四）

などである。これらはすべて船旅の歌であり、それもおおかたは夜の歌である。ゲートルも歌った旅人の夜の歌の系列に、日本の詩歌が混沌と薄明から詩を自覚して来る径路を読み取り、それを自分の創作態度としたのが逗空だったのである。

安乗の崎の歌も、言うまでもなく旅人の夜の歌である。安乗の灯台を見たのは、渡船の中で、その印象を旅宿でさらに反芻はんそうしたとき、「たびごころもろくなり来ぬ」の句が口をついて出たのだろう。昼間見た景色を、夜の鎮魂の歌に甦よみがえらせるのは、黒人や赤人あかひとの歌の常套じょうたうであった。「赤き燈の見ゆ」あるいは「燈の明り見ゆ」と言っても、眼前である必要はあるまい。この「見ゆ」という結句は前掲の人麻呂・黒人等の歌にあり、それを学んでいるのである。「赤き燈」の方が、第一印象をじかに断定的語気でもち出しているが、しばらくたっての反省的な気分が加わると、「燈の明り」となる。感覺的なものが沈んで、心象の中に或る情緒的な燈が灯される。夕景に見たその強い印象が、夜の静けさの中でいっそう強いイメージとして再現することは、別に珍しいことではない。船の上で感じた気持の動揺が、何時までも余韻を引き、その快い、静かなたゆたいのなかに作者はあるのだと言ってもよい。「旅ごころもろくなり来ぬ」は、かならずしも深い気持の籠こった、揺るぎない表現だとは思わないが、遠くもやって来たという気持を籠めて、「志摩のはて」を自然に呼び出す。夜中の旅宿でのひとりに還った、なにか祈るような気持が籠められている。

こういう歌から、迢空独自の叙景的な抒情歌は出発しているのである。

萬葉の近代感　このときの旅中の歌は、晩年になって迢空が『自歌自註』を口述したときも、幾首か抜き出して回想した。(この口述は、『海やまのあひだ』『春のことぶれ』の二部の歌集で途切れているが、この後も私はたびたび引用することがあるだろう。作者自身が自分の歌を見る眼と、第三者としては、そこに自から相違もあるはずである。)

この数首の抄歌は、安乗の崎の歌の外には、次のようなものがある。

闇に　声してあはれなり。志摩の海　相差の迫門に、盆の貝吹く

天づたふ日の昏れゆけば、わたの原　蒼茫として　深き風ふく

山めぐり　二日人見ず　あるくまの蟻の孔に、ひた見入りつゝ

青山に、夕日片照るさびしさや　入り江の町のまざりと見ゆ

たま／＼に見えてさびしも。かぐるなる田曾の迫門より　遠きいさり火

いろいろの試みが見え、変化に富んでいるが、全体としてはやはり萬葉の羈旅の秀歌群が下敷になっている。「たま／＼に」の歌は、安乗での作より、さらに深い寂寥感を出そうとしている。旅中の歌は、叙景歌にある人生的感慨を付け加えるのである。これは西行・宗祇・芭蕉などの旅の詩人の詠草にもつながるものであり、今日の旅行の歌、というよりハイキングの歌には、絶えてないものである。この外にも挙ぐべき歌が多い。

名をしらぬ古き港へ　はしけしていにつむ人の　思ほゆるかも

あかときを　散るがひそけき色なりし。志摩の横野の　空色の花

大海にたゞにむかへる　志摩の崎　波切の村にあひし子らはも

旅ごゝろ ものなつかしも。夜まつりをつかふる浦の 人出にまじる

青うみにまかゞやく日や。とほくし 妣ははが国べゆ 舟かへるらし

波ゆたにあそべり。牟婁の磯にゐて、たゆたふ命 しばし息づく

わたつみのゆふべの波のもてあそぶ 島の荒磯アヲソを漕ぐが さびしさ

わが帆なる。熊野の山の朝風に まぎり おしきり、高瀬をのぼる

どれも静かな境地で詠み出した、沈潜した調べの歌である。逈空が黒人について言ったように、「瞑想的な寂けさで、而も博大な心が見える歌」であることを目標としている。そのしなやかさへ、すでに一步も二歩も踏み出している。

「天つたふ」の歌と、「波ゆたに」の歌は、明かに旅人の僂従たちの歌を下敷にしている。

たまはやす 武庫の渡りに、天つたふ 日の暮れゆけば、家をしぞ思ふ(卷十七・三八九五)

家にも たゆたふ命。浪の上に漂うきてし居れば 奥処おくか知らずも (卷十七・三八九六)

これらの瞑想的な歌の影響は、学生時代の遅い時期に、すでにあつたと言う。萬葉の騷旅歌のなかでも、黒人の歌とこれら僂従たちの歌とが、とくに強く「奥熊野」の一連には顔を出している。この好みは終生棄てなかつた。それは「アララギ」を中心とする一般の萬葉観とのあいだには、大分開きがあつた。逈空が萬葉の歌風の窮極境と考えたものが、一般には萬葉のなかで第二義的にしか位置づけられていないのである。逈空はこのような萬葉観に不満を持っていた。「叙事詩や歌垣の謡や、ほかひ人の流布して歩いた物語歌の断篇やら、騒がしいものばかりの中に、どうしてこんなよい心境が、歌の上に現れたのであらう」(叙景詩の発生)と、黒人について言っている。世間で素朴と言ひ、雄勁ゆうけいと言ひ、莊重と言ひ、情熱的と言ひ、萬葉集の歌が、実はよそおわれた莊重であり、誇張された情熱に過ぎない

ことを繰り返し言っている。『叙景詩の発生』の一文は、黒人の讃歌と言ってもよい文章である。

「家にても」の歌に触れながら、逍空は次のようにも言っている。「本集の歌を素朴だ、といふのは総括しての概観であつて、奈良朝及びその前代は、外来文化の消化せずにはひつて来た時だから、ちやうど桃山時代などに似てゐて、もつと思想的な動搖のあつた時代である。……こんな歌に出会ふと、我々は思ひがけぬものに、ぶつかつたこゝちがする。仏教的なある思想性を持つてゐて、漠としてゐる点もあるが、われ／＼の近代感にびつたりはひつて来る歌である。」（萬葉集における近代感）

「たまはやす」の歌でも、「我々の近代感にびたりと来る処がある」と言っているが、ことに後者になると、われわれの持っている萬葉鑑賞の類型から、かなりはみ出してくる。少なくとも、人麻呂のディオニュソスの声調の歌を好んだ斎藤茂吉とのあいだには、大きな違いがある。そしてこのような好みに、逍空の個性があるのだが、それが如何に展開されて行くかは、この逍空歌抄においても、今後見て行くことになるだろう。

一つだけ言えば、素朴とか情熱的とか言つても、誇張や愚昧ぐまいを含んだ歌を、彼は極度に好まないといふ潔癖さを持っていた。そして萬葉集の歌の到達点も、知的・思想的な傾向の現れている歌に認めた。彼が「近代感」に触れてくる歌として高く評価するのは、黒人からある種の赤人の歌や旅人の僉従たちの歌を経て家持かもちに達する系列なのである。そしてその系列は、茂吉・赤彦を代表とする近代の萬葉調歌人たちからも、鑑賞・批評においては彼らの影響下にある萬葉学者たちからも、あまり尊重されていないものである。

「家にても たゆたふ命」の歌など、私といへども、逍空の指摘がなかつたら見過してしまつていたであらう。この歌の境地をはっきり説明することはむずかしい。一種の不安の思想と言つたらよからう。

「漂く」は漂流であり、世間虚仮の思想に犯された者の、実体のない存在の感じがここには現されている。先のことはまったく分らないということ、浪の上に揺れ漂っているが、強く実感しているのである。形としては旅の歌の発想のなかに入り、夜の鎮魂の歌なのであるが、根底から揺さぶられている生命感の不安がにじみ出ている。

道空が「たゆたふ命 しばし息づく」と言ったとき、やはりこの萬葉の歌の底に流れている微かな思想の影に触れていたのである。別に「おくか知らずも」という歌も作っている。

(天海のおくかも知らず行くわれを) (大船のりて海行く海はつきずも)
ゆくところなしとかいはむわたつみに七日こぎつゝおくか知らずも

彼にとつては、旅情とは「たゆたふ命」「おくか知らぬ命」を噛みしめることであった。萬葉の「たゆたふ命」について、彼は「心と命との間を考へるのが、このいのちにあたる様である」と言っている。存在感と言ったらよいかも知れない。それは自分に対してまったく無関心であり、無表情でもある悠久の自然に気づいたとき、意識に上って来る一つの根源的な不安である。かつての人麻呂・黒人・赤人等がそうであったように、旅はその機会であった。異郷に旅した当時の詩人たちの胸を充たした深い孤独感が、この志摩・熊野路の旅で、いま道空の胸にも再現するのだ。「天づたふ」の歌で、「深き風ふく」と言ったのも同様だろう。一見未熟の言葉だが、「深き風」とわざわざことわらなければならなかったのは、深い寂寥の感じに捉えられた彼のつく息の深さなのである。海原を渡る風を、よそごととは思っていないのであり、風はそのまま彼の胸のうちをも吹き渡るのである。

「ゆふべの波のもてあそぶ」と言ったのも、無心の波に寄せる作者の心を物語っている。揺れる波にすっかり自分をまかせきった心である。あるいは、間切り(風に逆らう)押切り(流れに逆らう)高瀬を上